

【最優秀賞】松山地方法務局長賞

「大切な命」 愛南町立御荘中学校 3年 宮本龍太

一人に一つ、平等に与えられた大切な命。そして、いつかは終わりを迎えるもの。だからこそ、そのかけがえのなさを感じるものである。

しかし、その命を粗末に扱う現実がある。ロシアによるウクライナへの軍事侵攻が始まってから五百日が過ぎる。両国の犠牲者は増える一方だ。テレビで家族や友人、大切な人を失い泣き崩れている場面を何度も見た。それを見るたびに僕の胸は苦しくなった。平和な日常が、死と隣り合わせの不安な日々に一変したのだ。そして、そのような毎日が今日まで続くとは予想しなかったと思う。

ある日、この戦争について家族で話題になった。「何で今さら戦争なんか。」、「何か私たちにできることはないかな。」、「早く戦争が終わらないかな。」様々なことを話した。しかし、本当の戦争の恐ろしさを知ることはできない。これらは戦争のない平和な世の中に生きる僕たちならではの意見だろう。僕は戦争に反対だ。なぜなら戦争は命を奪うからだ。失うものは多いが得るものはない。戦場に赴く兵士には、帰る場所があるし、大切な家族がいる。戦地で無事であるかどうかを心配するだろう。そして、その死を悲しむ人がいる。だから僕は早く戦争が終わってほしい。

僕にも大切な家族がいる。しかし、病気はその大切な家族を奪っていった。

僕が中学校一年生の冬のことだった。中学校への入学を楽しみにしていた小学校六年生の妹が突然熱を出したのだ。熱は一、二週間続いたのだろうか。原因が分からないまま過ぎていく時間は、僕たち家族にとって、とても長く感じられた。不安な時間が過ぎていった。レントゲンを撮ったことで病名が分かったが、病気と闘わなければならない厳しい現実がそこにはあった。心の整理のつかない僕は妹にどう声をかけたらいいかわからず、ただ「頑張れ。」としか言えなかった。

妹は松山の病院に入院することになった。始めの一、二か月を妹は一人で過ごした。病気への不安や一人で過ごすことの寂しさを考えると、僕には我慢できるだろうか。僕にはできないことを成し遂げる自慢の妹だ。その後、母は付き添いで妹のいる病院に泊まることを決めた。僕は妹と母がいない生活に違和感を覚え、寂しさが募った。しかし、辛いのは自分だけではないし、誰よりも辛いのは妹だと思い我慢をした。一ヶ月に数度、妹のお見舞いに行くのが楽しみだった。妹は僕を見て喜んでくれたが、家に帰れない寂しさや病気との闘いに疲れているのか、眠たそうであった。

中学校二年になった僕は修学旅行をみんなと一緒に楽しんだ。修学旅行を終えたその夜中、祖母の携帯に一本の電話があった。「妹が亡くなった。」と。僕たちは急いで松山の病院に向かった。僕は悔しさと悲しきで胸が一杯になり、泣くことしかできなかった。妹は、中学校生活を送ることなく、亡くなったのだ。家

族や友人など、大切な人の命が失われることの重大さと深い悲しみや、もう二度と会えないのだという喪失感を知った。

一人に一つ、与えられた命。決して軽いものではない。誰にも代わりのきかない、かけがえのないものである。僕の命も、あなたの命も。そして、戦争で失われた数多くの人々の命。兵士だけではない。若者やお年寄り、小さな子どもたちにもその命は平等にあったのだ。そして、中学校でバスケットボール部に入ることを楽しみにしていた僕の妹にも。生きてたくても生きられなかった命があることを知ってほしい。自ら命を絶とうとしている人に僕の思いが届いてほしい。昨年の自殺者は二万人を超え、その数の多さに驚くばかりだ。生きているだけで幸せだという事実を忘れさせるくらいの、どんなに大きな悩みを抱えていても、与えられたたった一つの命を生きてほしい。あなたの周りを見回してほしい。あなたのことを大切に思っている人がいる。あなたを失ったら深い悲しみに沈む人が必ずいるのだから。

僕は今、一日、一日を誰よりも大切に生きようと思っている。人間だけではない。生き物の全てに大切な命がある。無邪気に殺してはいけない。五匹の金魚とたくさんのメダカを飼っているが、真剣に向き合って飼えば家族のように思えてくる。どんな命でも大切にすべきである。いつかはなくなる命だけれど、どんな命とも「一緒に成長したい」という気持ちを持って接するようにしている。

未来は誰にも分からない。いつ戦争や病気、交通事故などで失われるかもしれないのだ。だから一日、一日を大切にしたい。皆に平等にある命の重さを知ったからこそ、生きていることの幸せを感じる。僕は命と向き合う看護師の道を目指したいと思っている。